児童の自尊感情や自己肯定感を高める教師のかかわり
－授業記録における教師の言葉掛けをもとに－

所属校：武蔵野市立井之頭小学校
氏　名：三　品　孝　之
派遣先：帝京大学教職大学院

キーワード：自尊感情・自己肯定感・授業記録・省察（リフレクション）・プロセスレコーダー

Ⅰ　研究の目的

近年、自己肯定感の低い子供の課題や国際社会において求められる日本人としてのあり方が懸念されている。国際調査等でも諸外国と比較して、日本の子供の自尊感情が低い傾向にあることを示された。私自身の経験からも自分に自信がもてないなどの児童が増えてきたと感じる。

児童が学校で自尊感情や自己肯定感を高めるためには、ありのままの自分の存在を受け入れ、他者とのかかわりの中で自分に自信をもつ経験を積み重ねることが必要である。本来、自尊感情や自己肯定感は、自らの感情であるため児童自身が育てるものである。しかし、教師のかかわりや言葉は、児童の自尊感情や自己肯定感を高めるために影響力のある他者とのかかわりとして必要不可欠である。したがって児童の自尊感情や自己肯定感を高めるには、教師がこれらを意識したかかわりをすることが必要である。このことから、教師は児童にどのようにかかわり、どのような言葉掛けをしているのか、教師はそれを意識的に行っているのかを捉えたいと考えた。また、教師が授業で扱う言葉には、無意識に発している言葉もあると考える。その無意識に意識が向くようにすれば、教師はより意図的計画的に児童の自尊感情や自己肯定感を高めることを意識し、高める機会を増やすことができるのではないか。さらに、そのかかわりを意識することは教師の指導力の向上にもつながり、よりよい授業改善ができると考えた。そこで、児童の自尊感情や自己肯定感を高めるために、教師は授業において児童とのかかわりをどのように意識するのかを教師の言葉掛けをもとに探り、授業者への助言や支援を行うこととした。

Ⅱ　研究の方法

１　基礎研究

自尊感情の定義はさまざまなとらえ方があり、名称も解釈の仕方も様々である。そのため、本研究では、東京都教育委員会のとらえる自尊感情「自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」（『平成21年度　東京都教職員研修センター紀要　第９号』平成22年３月）を生かし、自尊感情の定義とした。

２　実践研究

授業観察を続け、その授業記録をもとに児童の自尊感情や自己肯定感を高める教師のかかわりや言葉掛けを探る。また、授業参観後に必ず児童理解や授業改善を目的とした授業者との話し合いから変容を促す。その際、できるだけメンタリングを意識したかかわりをもち、教師の意識の変容を探る。また、東京都教育委員会の『自己評価シート』や『自尊感情や自己肯定を高めるための指導上の留意点』（東京都教職員研修センター平成22年２月）を参考にしてかかわりの視点を確認する。また、メンタリングを推進する自身の省察からも助言者の変容を検証する。

３　課題追究の方策

教師は、授業の中で様々な言葉を発する。その中でも授業記録から自尊感情や自己肯定感を高める言葉に着目する。本研究では、自尊感情や自己肯定感を高める言葉を教師が意識することを目的としている。そのため、教師の無意識を自覚させ、意識させることで授業や児童へのかかわりを省察できるようにしたいと考えた。その方策としてプロセスレコーダー　ワークシートを活用し、授業者が自身の授業を省察できるようにする。授業者自身が自らの行為行動、言動を省察し意識化を図るために有効であると考えた。授業記録をもとに授業者自身の意識を変容させ、メンタリングの活用を通して授業改善・指導力向上につながることを期待した。

Ⅲ　研究の結果

１　実践の記録（授業観察と記録から）

(1) 授業における教師のほめ言葉

授業観察を続けた記録から、自尊感情や自己肯定感を高めるために、効果的なほめ方を整理した。

①　ほめる頻度・回数が多い。
②　ほめるタイミングは、即時的である。
③　ほめる内容は、具体的である。（課題にあったこ

と・一人一人に合ったほめ方・教師が共感、感動しているなどの使い分け）

効果的なほめ方をする教師の学級では、児童が賞賛や感嘆の言葉を挙げる場面も多く見られた。

⑵ 言われてうれしかった言葉、心に残った言葉

第２学年の児童、記述式の質問紙による調査。傾向として、人の役に立ったり、感謝されたりしたときの言葉が多かった。うれしいと感じる言葉の中には、他者とのかかわりの中で自分が貢献できたときの言葉が心に残っている場合が多かった。本調査では、第２学年という発達段階もあり、このことを検証できるには至らなかったが、かかわりの中で自分自身も他者からも認められたことの経験が実感につながり、記憶に残っていることが考えられる。今後、児童の喜びや自信にかかわる言葉と自分自身の自尊感情や自己肯定感の高まりとの関係を確かめてみる必要があると考える。

⑶ 「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を参考にして

東京都教職員研修センター作成の「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」や「自己評価シート」を参考にした。学級担任の主観では見られない児童の傾向を把握するのに役立った。また、授業の振り返りや改善の観点に役立てることもできた。

２ 授業者とのメンタリング・省察

⑴ 省察（リフレクション）の必要性

授業観察・授業記録をもとに、助言・支援を伝える方法で授業を省察した。しかし、助言者が助言する内容は、一方的に授業者へ気にかかることを伝えることにとどまった。また、児童の自尊感情や自己肯定感を高める言葉への助言は、助言者の力量不足もあり、一般論で終始する結果となった。そこで改善のために、

① 授業者の意識の変容をうながすためにメンタリングを意識して授業者とかかわる。

② よりよい省察（リフレクション）のために、プロセスレコーダーを用い、授業者自身が抱える課題により迫れるようにする。

こととし、授業観察・授業記録にもとづく授業分析とメンタリングと省察の手法を取り入れ、授業者のかかわりや言葉を意識化するようにした。

⑵ プロセスレコーダーを活用した省察Ⅰ

授業記録と併せ、授業者と助言者がそれぞれ本時の場面で違和感をもった場面を『プロセスレコーダー　ワークシート』に書き込み、共有することで授業の省察（リフレクション）とメンタリングに活用することとした。授業者は、プロセスレコーダー　ワークシートを活用することで児童一人一人を思い返し、意識することができた。このことから、教師の児童の自尊感情や自己肯定感を高めるための意識と教師や参観者の授業改善への意識を変えることは明らかであった。

⑶ プロセスレコーダーを活用した省察Ⅱ

メンタリングを中心に授業観察を２回、プロセスレコーダーの活用による省察を３回行った。本実践では、授業記録と共にはじめからプロセスレコーダーを使用し省察していった。授業記録と併せ、プロセスレコーダー　ワークシートをもとに授業の省察を行った。

Ⅳ 考察

１ 教師の意識化

教師への意識付けによって次の効果が見られた。

① 授業者が無意識に発している言葉を客観的にとらえ、意識付けることができる。

② 教師が、児童理解を深めようとする意識に変容させることができる。

③ メンターとメンティーのかかわりの中で相互の学びと変容を見ることができる。

メンタリングは、研究授業の協議会等での学びとは違った視点での気付きや学びがある。

２ プロセスレコーダーの活用

プロセスレコーダーの活用で、以下の効果があった。

① 教師は、具体的な場面を想起し、省察する。

② 児童と教師のかかわりが詳細に見えてくる。

③ 児童への理解が深まり、課題を継続的に捉える。

④ 次時への計画や見通しが明確になる。

授業記録と併せ、プロセスレコーダーを活用することで授業者自身、参観者自身が違和感を感じることを共有することができた。授業者自身の気付きから授業の省察をすることは、より深い気付きでの自分自身を語っていると考える。

教師の無意識を意識化させるために行ったメンタリングと省察（リフレクション）は、プロセスレコーダーを活用することで、自尊感情や自己肯定感を高める教師の意識と同様に児童へのかかわり方を変容させることに効果的であった。また、このような教師自身の意識と児童へのかかわりの積み重ねが、児童の自尊感情や自己肯定感を高めることへつながると考える。

教師が、児童の自尊感情や自己肯定感を高める意識をもち授業に取り組むことは、児童一人一人の理解に努め、具体的に次の手立てを打つ意識につながる。その結果、授業の改善や教師の指導力の向上につながったと考えることができた。